
MAN EATER

九里 瑛人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A N E A T E R

【Nコード】

N 6 5 5 8 A

【作者名】

九里 瑛人

【あらすじ】

無法世界アルベスタ。犯罪者達の巢窟となったこの世界の悪を喰らう賞金稼ぎ、マンイーター。その慈悲無き【紅鬼】の名を持つ一人のマンイーターの生き様をとくと御覧あれ。

「stage 01 LEON」

無法世界アルベスタ

法が失われた世界、アルベスタ。【力】ある者達により崩壊したこの世界で人々は血で濡れた街で武器を握って命を紡ぐ。月日が経つ毎に堕ちていくこの世界を救うべく一人の富豪がひとつの法を定めた。

「重犯罪者、及び組織を生死問わず差し押さえた者にそれ相応の報酬を与える。」

即ち【賞金稼ぎ】であるこの世界において犯罪者を【裁く】力を持つ者達を人々はいつしか【マンイーター】と呼び始めた

この物語は慈悲なき冷血なる悪魔と言われた男、【紅鬼】の異名を負った一人の人間の話である。

「Stage 02 RED・DEMON」

暗い路地裏を三人の若い男が懸命に闇の中を駆けていた。

「最悪だ！ よりも、よって、紅鬼に見つかる、なんて！」

息を切らしながら大通りの光を目指し無我夢中で走る男達。三人の内一人が通りの光に包まれた。しめた、と笑みを浮かべた二人の男を包んだのは光ではなく真紅の鮮血であった。

何事かと立ち尽くす男達は視界に入ってきたものを見て事態を察した。足元に転がっている、胴で二つに分かれた仲間の遺体、血で濡れた自分達の衣服、そして血で濡れた巨大な両刃刀を担いだ黒コートの男……

不敵に笑う黒コートの男を見て男が我に返った

「レウアール！ きさまああああ！」

そう叫ぶと止めに掛かるうとした仲間の男を振り払い、懐の銃に手を掛けた。

「遅え……！」

男が銃を構えるよりも先に黒の男の放った縦一線が男を左肩から股にかけて一刀両断にした。

ずるりと爛れ落ちた仲間の肉塊を見て最後の一人が後退り命ごいをした

「分かった！ 大人しく投降する！ だから命だけは！ 頼む！」

涙を流し頼み込む男の悲願すらも巨大な大剣は断ち切った。

「つまらねえ。命こうぐらいなら禁忌に足突っ込むんじゃねえ。やるなら最期まであがきやがれ」

そう言って舌打ちをして大剣の血を拭い、男達の首を袋に詰めて担ぐと黒コートの男は煙草に火を着けた。

「それから俺は上の名で呼ばれんのは好きじゃねえ。俺様を呼ぶ時は「レオン様」だ。あの世でしっかり後悔してろ」

そう言って首の入った袋を担ぎ直した。

血で染まったコートを羽織る情けなきその男の姿はまるで真紅の鬼そのものであった。

「Stage 03 NO・JUSTICE」

束縛された犯罪者達の収容所、プリズン。

賞金稼ぎ達に捕まった者達は相応の報酬と引き換えにここに投獄される。

「生死問わず」

自らの私益のために他者を喰らう。その自然の摂理の体現者ともいえる者達を人々は畏怖の念を込めてこう呼んだ。

「MAN EATER」

ゴトツ。真つ赤な髪をした黒コートの男が黒い袋をカウンターに乗せた

「麻薬売人首謀者、ネリー、アシモフ、バジル。三人合わせて八万\$。さつさとよこせ」

新米らしき係員がビクビクしながら袋の中身を確認する。気の弱そうな彼は案の定、袋の中身を見て嘔吐した。

チッ、と舌打ちをして黒コートの男はカウンターの奥の年輩の男性を呼んだ。

「マーシユ！手前んとこの新人また吐きやがったぞ！使えねえから辞めさせる！」

奥から現れた男性、マーシユが怒鳴り声で返事した。

「うるせえバカ野郎！どうせお前が賞金首を仏様にしちまったんだろうが！手前のせいで今月既に三人も辞めちまったんだ！可哀相にこの仏さん、涙流してんじゃねえか」

袋の中身を確認したマーシユは哀れみを込めて三人の首を掃除人に明け渡した。

「レオン、お前さんは賞金稼ぎとしての腕は一流だ。手前と対等にやり合えるのはそうそういやしねえ。ただ・・・」

説教はうんざりといった顔でレオンは言葉をふんだくった。

「人としての情けが足りねえ、か？くだらねえ。この稼業は殺るか殺られるかだろうが。命も賭けられねえクセに犯罪に手え染めんなつての」

レオンの言葉にはあからさまな卑屈と憤怒が聞いてとれた。ため息をついてマーシユはレオンを諭した。

「ふう、もう何言っても無駄だな。レオン、これは説教じゃねえ、警告だ。近頃ギルドの連中がお前さんにイエローカードを切った。これ以上派手に殺ると追放どころか手前が追われることになる。それから腕の建つ賞金首共がお前を始末しようと徒党を組み始めた。

このままだといくらお前でも泥の棺桶に足突っ込む事になるぞ。どうだ？ここらで考え改めねえか？」レオンが面白くないといった表情を浮かべて葉巻を噛んだ。

「誰がはい、そうですか？て手引くかよ。俺を狩ろうなんていい度胸じゃねえか。立ち塞がるようなら全員斬り捨てる。ギルドだろうが餌共だろうが、だ。なんなら悪の帝王にでもなつてやるさ。っと、早速勇者様達の登場らしいぜ」

そういつて横に目をやった。賞金首共だな、マーシユが声を潜めて囁いた。

「安心しろ。店ん中では暴れねえよ」

そう言うつとレオンは席を立った。それ以上は二人共言葉を交わさなかった。ゆつくりと店を出るレオンに目をくれずにマーシユはひっそりと呟いた。

「正義もへつたくれもねえってか。ああいう類のバカは殺しても死なねえっつーが。今回はヤバイかもな。結構気にいってたんだがなあ。何がアイツをあんなにも駆り立てるんだか。・・・死ぬなよ、紅鬼・・・」

「ここらでいいか・・」

通りにでたレオンは背中の大剣に手を掛けた。それに合わすようにして物影から得物を手にした賞金首達が次々と現れた。少なくとも20人はいるであろう。その中から一人、主格であろう口髭の男が口を開いた。

「マンイーター。紅鬼のレオナルド・レウアルだな。お前は危険過ぎる悪いが我らのために死んでもらうぞ」

「上等だ。数ごときじゃ埋まらねえ力の差つてやつを手前の身体に教えてやるよ」

不敵に笑うレオンに賞金首達が一斉に飛び掛かった。

明らかに不利な立場をもとめせず、ただ力任せに襲い掛かる賞金首達を斬って捨てた。一降り。たったの一降りでも肉塊が出来上がった。次々と両断されていく仲間に目もくれずに男達はレオンに飛び掛かって行った。

たった数分の出来事でその場に残ったのは幾つもの血の池と数十の肉塊、そして死地に佇む一人の羅刹。

「ふん、話にならねえな。雑魚が何匹束になってかかってこようが俺の肥やしにしかならねえってのが何でわからないのかね」

「それはこちらの台詞ですよ。何故あなたは命を奪う事でしか物事を解決しようとしないのでですか」

凜とした声の持ち主は少女であった。淡い桃色の長髪の少女でその手には身の丈ほどもある大鎌が握られていた。

「Stage 04 SWEEPER」

「・・・同業者か」

レオンの問いに少女は静かに答えた。

「バウンティハンターズギルドから参りました。メリル嬢、ガイドと申します。」

この度の用件は貴公の活動についての嚴重警告です。貴公は賞金首に対して必要以上の殺生を行っているため、これを悔い改めよとの伝達です。なお、貴公がこの勧告を無視した場合、ギルドの追放及び貴公の処分を言い渡されております」

「掃除人か。気に入らねえな。手前、得物の割りに血の臭いがしやがらねえ。その鎌は飾りか？あ？俺を殺りたきや相応の野郎を連れて来い。ギルドの爺共々に伝えな。賞金首を根絶やしにしたら次は手前らだ、てな」

レオンの返答にメリルは静かに溜め息をついて鎌を構えた。

「それでは仕方ありません。先程申し上げた通りバウンティハンターズギルドの名の下に貴公の処分を実行します」

そう言った直後、少女の姿が消え、一陣の砂煙が舞い上がった。

（速い・・・！）

そう心で呟いた時にはメリルは既にレオンの背後から首へ目掛けて大鎌を横薙ぎに振り下ろしていた。

間一髪剣の腹で受ける事ができたが、その衝撃でレオンは後方に吹き飛ばされた。

（この女、かなり殺り慣れてやがる・・・）

「如何なされました？」

呆気にとられているレオンの表情を読んでメリルが口を開いた。

「先程貴公は申されましたね、私から血の臭いがしないと。何故だかお分かりになりますか？血を流す必要がないからです。相手に傷一つ負わすことなく確保できるからですよ」

「偉く手前の腕前を自負してんじゃねえか。自慢話は俺に傷付けたから言っただな」

レオンの挑発をメリルは鼻で遇った。

「自負？それは違いますよ。私は事実をそのまま述べただけですよ。それは貴方自身がその身で味わったはずでは？

それに傷なら既に付いてますよ。首筋の切り傷に気がつきませんでしたか？」

ハッ、と首筋を抑える。掌にうつすらと赤い線が付着した。それを見たレオンが不気味に笑った。

「面白え。面白えぞ女。手前は本気で相手してやるよ。紅鬼の名前をその身に刻んで逝けや」

そう言っただ剣を投げ捨てると懷から二振りの円月刀を取り出し、それを逆手に構えた。

「直情径口 疾風怒涛

森羅万象 生殺与奪

盛者必衰 獅子奮迅！我が演舞、とくと御覧あれ・・・」

今度はレオンの姿が砂煙だけを残して消え去った。メリルは正面からの衝撃に吹き飛ばされた。とつさに鎌で受けるも、先程のメリルのそれとは別物で、少女は受け身も取れずに地を這う嵌めになった。そこへすかさず上空からレオンが追い撃ちをかける。

これも鎌で受けるが鏑競り合いはレオンが優勢だ。力が違う。

メリルはレオンを蹴り飛ばして間合をとった。しかしレオンの追撃は止まなかった。スピードならメリルが優勢であったがエモノをブレードからハンシャトルに変えたレオンの前では意味を成さなくなっていた。

今となつてはスピードこそ互角だが力に於いても手数に於いてもレオンが上であった。

懸命に応戦するも徐々に追い込まれ、モロに一撃を受けた。赤く染まった腹部を押さえるメリルの膝が落ちる。

「勝負あつたな・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6558a/>

MAN EATER

2010年10月19日05時25分発行